

あにめいど！

くうちの兄貴はメイドさん！く



序章　　うちの兄貴のメイドデビュー

「いらっしやいませー」

「このあと四時から体育館で、『ウエストサイドストーリー』を上演しております。見ていただくさーい」

「こちらの教室は、美術部の作品展示を行っています。どうぞ、ご覧下さい」

色とりどりのテーブルやリボンで飾られた校舎は、一階から最上階の四階まで、カーニヴァールのような熱気に包まれていた。

今日は九月の第三日曜日。

私立のお嬢様学校・文君女学苑の文化祭、二日目だった。

校内は大勢の来場者でにぎわっている。家族連れなどもあるが、大半は女子学生だ。他校からも多くの生徒がやってきて、様々な制服を着た少女たちがファッションショーのように行き交っていた。

文君女学苑の生徒たちは、階段の近くや廊下のあちこちに立って、来場者を呼び込んでいる。彼女たちは行き交う人に声をかけ、与えられた教室に一人でも多くの来場者を呼び込もうと躍起になっていた。

既に昼の三時を過ぎているが、にぎわいは衰える気配を見せない。

そんな熱気に包まれた、校舎二階廊下の一角で、

「い、いらっしやいませー……」

「ちよっと、お姉ちゃんっ！ 『いらっしやいませ』じゃなくて、『お帰りなさいませ、ご主人様』よ。それに、声が小さい。もっと大きな声で、ちゃんと聞こえるようにしないと」
「そんなこと言っちゃって、真姫……！」

メイド服姿の二人が、なにやら言い合っていた。

二人がいるのは、八年D組の教室前だった。

すぐ近くに置かれた看板には、少女漫画のようなタッチでメイド服の少女が描かれ、ポップなフォントで「メイド喫茶『アニメイド』」と書かれている。

二人が着ているメイド服のデザインは、ほとんど同じだった。襟付きの黒い長袖ワンピースにひらひらフリルのエプロン、レースのヘッドレス。ワンピースはミディアム丈のラウンドスカート。足元は黒のパンプスと、太腿の半ばまで覆う純白のニーハイソックス。

誰が見ても間違えようのない、真正正銘の「メイド服」だ。

違いと言えば、背の低い方はスカートの下に、花びらのように幾重にも重なったパニエを仕込んでいた。それがスカートをふんわりと押し上げて、ボリュームを与えている。

これに対して背の高い方はパニエを入れず、丈の短いスカートとオーバーニーソックスの

間に絶対領域が出現している。スカートは股下ギリギリで、あともうちょっとで下着が見えるか見えないかという絶妙なチラリズムを發揮していた。

ひそひそと話している二人のメイドは、パニエの有無以外にもずいぶん印象が違っていた。

背が低いほうの少女は、高慢なペルシャ猫のような美少女で、アゲハチョウをモチーフにしたヘアクリップでツインテールにしている。腰に手を当ててもう一人を見上げている。小さいながらも迫力充分だ。

それに対して背が高い方の少女は、どこかおどおどして、恥ずかしそうにスカートを気にしている。緊張のあまり震えだしそうだ。目元は小柄な少女に似て猫のようだが、弱々しいと言いたくなるほどに優しい。まるで、隠れ家から引きずり出されて不安に怯える小動物のようだ。

理由を聞けば、それも無理のないことだと大半の人が納得するだろう。

正確に言えば、背の高い方は「少女」ではない。

二人は兄妹だった。つまり、「お姉ちゃん」と呼ばれている背の高い方は、姉ではなく兄だったのだ。

断っておくが、兄——森井拓哉に、女装趣味はない。普段は男子制服を着て都立学校に通う、ごくごく目立たない普通の一年生男子だ。

にもかかわらず、メイド服を着せられ、大勢の人に見られる恥ずかしさに、彼の頬はピンク色に染まり、目には涙に潤んでいた。

(ううっ、見られてる……メイド服を着てるどころ、大勢の女の子に見られてる……)

(ば、ばれてないよね……？ 男だなんて知られたら、もう、生きていけない……)

心臓がドキドキして、痛いほどだった。恥ずかしさのあまりうつむいていると、

「ほらほらお姉ちゃん」妹が背伸びして、彼の耳元に囁いた。「あんまりうつむいてスカートばかり押さえると、逆に目立っちゃうよ？ メイドさんだから、もっと堂々としてなさい」

「しょ、しょうがないじゃないか。す、スカートなんて初めてだし、なんだか、何も穿いてないみたいで……それにこんなに短いスカートじゃ、すぐに中を見られて、その、ばれそうなんだけど……」

「大丈夫よ、お姉ちゃん。歩幅を狭くして、内股気味にゆっくり歩くの。ミニスカートに気を使ってる女の子みたいだね。そうすれば——」真姫はワントーン声を落として、「誰も兄貴が男だなんて、思わないから」

「いつ、言わないでよ、真姫……他の人に聞かれたら、ぼ、ぼく……」

「ちよとちよっと、お姉ちゃん」真姫はニヤニヤ笑って、「ぼく、なんて言っていると、それこそ『お姉ちゃん』が男なんだってばれちゃうよ？ ばれて恥ずかしい思いしたいんなら止

めないけどね」

「そんな、真姫、やめてくれ……!」

拓哉は、今さら回りをきよろきよろ気にする。幸い、廊下を歩く少女たちにも聞かれなかったようだが、彼の不安は消えない。

「ほらほら、恥ずかしがってる場合じゃないよ、『お姉ちゃん』真姫は急に真面目な顔になって、「メイド服を着て廊下に出るだけじゃダメなんだから。ちゃんとお客様——ううん、ご主人様をご案内しないと。さ、はじめよ」

「う、うん……」

拓哉は目を閉じて胸に手を当て、何度も深呼吸する。顔を真っ赤にして、はあはあと荒い息をついているその姿は、妙にエロティックだった。

「それじゃ、真姫はお店の中で接客してくるから、客引きをよろしくね。くれぐれも、ぼろ出さないように頑張って」

「う、うん……」

いつもなら、このあとに「任せておいて」と続けるのが、拓哉の口癖だ。

一〇年以上前に母親を亡くして以来、拓哉は海外出張の多い父親にかわり、つねに真姫の保護者として、彼女を見守ってきている。妹に頼まれれば、困った顔一つ見せずに引き受けてきた。

しかしいまは、そんな余裕を見せることも出来ない。

真姫はそんな兄を廊下に残し、メイド喫茶になっている八年D組の教室へと消えていった。

(ふう……ちゃんと言われたとおり、仕事をしないと……)

(でもやっぱり……メ、メイド服なんて恥ずかしい……ぼく、これでも男なのに……)

恥ずかしさにうつぶむいていたせいで、拓哉は気付かなかった。背後から、一団の少女がかづいていたことに。

「あ、あのっ!」

「わっ!?!」

拓哉は思わず悲鳴を上げた。慌てて両手で口を押さえ、背後を振り返る。

そこには、夏らしいセーラーワンピースを着た少女四人がいた。話しかけてきたのは、中央にいるポニーテールの眼鏡少女。手には小さなデジタル・カメラを持っている。

「いったい何だろう。拓哉は怯えながら、作り笑いを浮かべる。

「は、はい、いらっしやいませ——じゃなくて、ええと——お帰りなさいませ、ご主人様」

「あはっ、お帰りなさいだって。本当にメイド喫茶みたい」

「ねえねえ、メイドさん。写真、撮ってもらえる?」

「はい、かしこまりました」

そのくらいなら、おやすい御用だ。拓哉は少女の手からデジタル・カメラを受け取ろうと

する——が、

「うっ!？」

歩いた拍子に、スカートが太腿を撫でるようにこすり、女子用下着の中で密やかに勃起したものが左右にこすれた。

拓哉は反射的に股間に向かいかけた手を、何とか我慢する。

「ん? 短いスカートが、気になるの?」

カメラを持ったポニテ少女が、心配そうに訊ねてくる。

「は、はい、ちよつと、恥ずかしくって……」

「そりゃ、そんな短いスカートはいてるんだもん」別の少女が、くすくす笑いながら言う。

「その長さじゃ、ちよつと歩いたらすぐにパンツ見えちゃうじゃん。それともその、可愛いチェックのパンツ見せたいの?」

少女にからかわれ、拓哉は真っ青になってスカートを押さえた。

気をつけていたつもりなのに、見られてしまった。恥ずかしいだけならまだいい。もしもそのシヨーツに浮かんだ、女子ではあり得ない不自然な膨らみを見られていたらと思うとぞつとした。

「しっ、失礼いたしました。おカメラのほう、承ります」

拓哉は震える手で、ポニテ少女からカメラを受け取る。廊下の窓を背景に、拓哉は少女たちを撮影した。三枚ほど撮ったところで、

「ありがとう」

少女たちは満足したように言った。

やれやれ、何とか終わった——ほつとした拓哉は、ポニテ少女にカメラを返す。

カメラを受け取ったポニテ少女は、拓哉を見て、ふと名案をひらめいた表情になった。漫画だったら頭上に特大の電球が浮かんだことだろう。彼女は友人たちへと振り返り、

「ねえねえ! せっかくだからさ、メイドさんと一緒に写真撮らない?」

「あっ、それいいね!」

「ミキ、グッアイデア」

「ふふーん、でしょでしょ? もっと褒めたまえよ」

「あーはいはい、すごいすごい」

「この子はほつといて、と。メイドさん、一緒に写真お願ーい」

「あーこら、流すなー!」

仲良くはしゃぐ少女たちとは対照的に、拓哉は引きつった笑顔を浮かべたまま青ざめた。

(うそ……こんな恥ずかしいメイド服を着た姿を、写真に残されちゃうの……)

逃げ出したくてたまらない。でもどうすればいいのか判らず、拓哉が呆然としている間にも、事態は容赦なく推移する。

「すいませーん」

少女たちは、近くを通りかかった別の女子生徒のグループに話しかけて、

「写真撮ってもらえませんか？ こっちのメイドさんと一緒に」

カメラを渡された少女はうなずいた。

四人の少女たちの中央に立つ形で、拓哉は写真を撮られた。他の四人の少女と並ぶと、メイド服のスカートの短さがいっそう際だつ。

(年下の女の子より短いスカートだなんて、恥ずかしすぎる……！)

何枚か撮ったところで、少女たちはお礼を言って立ち去った。

拓哉はほっと息をつく。緊張のあまり、心臓が早鐘のように脈打っていた。真つ赤な顔で深呼吸を繰り返し、何とか落ち着こうとしていると、

「ちょっと、森井さん？」

「はっ、はいっ！」

突然の声に怯えながら振り返れば、メイド服姿の少女が目の前にいた。胸のプレートには「いとう」とある。拓哉が最初にこの店の前を通りかかったときに笑顔で出迎えてくれた少女で、今は一緒に、廊下で呼び込みをしている相方だった。

「写真撮影は、店内でだけよ。知らなかったの？」

「えっ、あの……ごめんなさい、知りませんでした」

「知らなかったなら、しようがないけど。次からは、まず店内にご案内してからにして。それと、立ってるだけじゃなくて、ちゃんとお客さんに声をかけて、呼び込んでちょうだい。メイド服を着て立ってるだけなら、カカシだっていいんだから」

「はい」

この言いぐさに拓哉はむっとしたが、言われても仕方ない。素直に頭を下げる。

「いとう」はふんと鼻を鳴らして、

「森井さんのお姉さんって言うからすごい人かと思ったけど、鈍くさいのね」

言い捨てるのと、すぐ近くを通りかかった女子高生に声をかけた。

拓哉は恥ずかしさといたまれなさにうつつむいて、両の拳を震わせた。こらえきれない悔しさに、唇が震えた。

(恥ずかしい……こんな恥ずかしい思いは、初めてだ……)

(メイド服を着て、年下の女の子に怒られながら、働くななんて……)

(ぼくはただ、妹の学園祭を見に来ただけなのに――)

(続く)